

---

# マニア・タイフーン

河野 る宇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マニア・タイフーン

### 【Nコード】

N2451W

### 【作者名】

河野 る宇

### 【あらすじ】

\*世の中には物好きがいるものだ……わざわざこんな世界のマニアになるなど、はた迷惑もいい処だ。

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

## \* 美女

「傭兵マニア……？」

金髪のショートヘアにエメラルドの瞳の魅力的な顔立ちをしている青年、ベリルは怪訝な表情を浮かべて目の前にいるカーティスを見やった。

「気をつけるよ。その女が近頃ウロウロしてるらしい」

ガタイの良いブラウンの髪の男は腕を組んで頷きながら発する。

「お前は色々と言説や噂の多い奴だからな。そいつの恰好の獲物だぜ」

仕事を終えたベリルとカーティスは、オープンカフェでコーヒーを傾けながらそんな会話を交わす。

「名前は」

「マーガレット。かなりの美女だ」

ベリルはそれにピクリと反応した。“美女”という部分にはなくカーティスの言葉にだ。

「詳しいな」

「実は俺も狙われてよ……」

目的の傭兵を執拗に追いかけて、満足するまで張り付いているという話にエメラルドの瞳を細めた。

「ストーリーだな」

「ストーリーだよ。片っ端からストーキングして写真を撮りまくってる」

「……写真？」

裏の世界にいる彼らが撮影されるのを嫌っている事を知ってやっているのなら立派な嫌がらせだ。特にベリルはそれを嫌う。彼の存在が必然的にそうさせるのだが。

「あの時はホント参ったよ。仕事もロクに出来ないのに闘う処が見たいとか抜かしやがるし……大変だったんだぜ」

深い溜息を吐き出し、頭を抱えてベリルに視線を向ける。  
「特にお前みたいなのはしつこいぞ」  
牽制するように発した。

ベリルはカーティスと別れて街中を1人、歩いていた。あんな話を聞いたあとただけに狙われるのは勘弁したいと小さく唸る。

「あ！ 金髪のショートヘアに、エメラルド色の瞳。彼がベリルね」  
1人の女性が10mほど先にいる男につぶやき足早に近づくと肩を軽く叩いた。

「？」  
後ろから肩を軽く叩かれて振り返る。

「初めまして」  
「？ 誰だ」

見慣れない女性に眉をひそめた。腰まである赤い髪は緩いカーブを描き、青い瞳とすらりとした肢体はくきりとした美書といったイメージだ。

「！」  
遠くにいたカーティスが慌てた顔で何か合図している。しばらく意味が解らなかったが彼の動作にピンと来た。まさか……

「私に何か用かね」

「あなたベリルでしょ？ 私マーガレット。ヨロシク」

「！？」  
「！？」  
「やっぱりか！？」

「！？ ちよっ……！？ 待つてよ！」  
私の事を聞いたわね！ 女性は必死でベリルを追いかけたが男の足に追いつけるハズもなく、見る間に遠ざかる後ろ姿を諦めて見送った。

「……もう！」  
悔しさに地団駄を踏んだ。

「はあ……」  
久しぶりに全速力で走った……追いかけてこない事を確認して立ち止まる。初めから自分を狙って探していたのか、偶然見つけたのか定かではないが前者ならこちらの動きを把握しているという事なので逃げてても無駄という訳だが。

「参ったな」  
木にもたれかかり長い溜息を吐き出した。

とにかく早々に引き上げよう。翌日　ベリルはホテルをチエックアウトしてホテルから出る。

「……」  
「ハアイ」

マーガレットが笑顔でベリルに手を振った。

「タクシー呼んでおいてあげたわよ」  
それを無視して歩き出す。

「あ！　ちよつと待ってよ！」  
パーキングに入り、オレンジレッドのピックアップトラックに乗り込んだ。

「……」  
助手席に勝手に乗り込んだ女性に眉をひそめる。

「降りろ」  
「折角タクシー呼んだのに車があるならそう言ってよ」

「……」  
いつ言えたそんな事……しばらく女の顔を見て女を蹴り出した。  
「キャッ!?　あんっ、もうっ酷いじゃない！」  
車は颯爽と走り去った。

なんなのだ一体……女の行動にさすがのベリルも少し動悸を覚える。もちろん恋ではなく恐怖でだ。嫌な予感がする。これは  
「何かが起こる……」

オレンジレッドの車を走らせながら冷や汗を流した。

しばらく走らせて車を駐める。そこに携帯が着信を知らせる振動を伝えた。

「ミシエルか。依頼か」

「仕事？」

「……」

いつの間に……開けた窓から顔を入れて問いかけたマーガレットに目を丸くする。

「！ 支障はない。内容は」

会話を続ける彼の横顔をじっと見つめる。整った中性的な面持ちが傭兵という仕事を想像させないほどに魅力的だ。

しかし細身の体にはほどよく筋肉がついているのだと腕を見て理解出来る。

「ついてくるな」

「イヤよ」

当然のように後ろをついてくる女性に眉をひそめる。

「……」

何を言っても無駄なのか？ 呆れながら小さなバーに足を踏み入れた。

「！」

店内を見回すとテーブルに見慣れた人物がいて、近づくと相手の男が軽く手を挙げる。それに同じように応えた。

胸を張って椅子に座っている男の後ろに、仲間らしき男が2人立っている。

「今回の依頼なんだが……！」

赤毛の美女が目に入り、男は続きを飲み込む。

「！」

怪訝な表情を後ろに向けている男に振り返るとマーガレットがそ

ここにいた。

「お前の彼女か？」

「いいや」

1人の男が女に気がつき口を開く。

「あ、この女マーガレットですよ」

「誰だ？」

その問いかけにもう1人の男が答えた。

「ほら、例の噂の傭兵マニア」

それを聞いた男は眉間にしわを寄せて青年を見つめる。

「お前……タゲられたのか」

肩をすくめた彼を小さく睨み付け男は立ち上がった。

「この話はキャンセルだ」

「！ 何……？」

驚く青年を見下ろしぶつきらぼうに言い放つ。

「そんなのがついてる奴に依頼は出来ん。仕事をしたきゃそいつを引きはがせ。この事は広がるぞ」

すると

「ちよつと待つてよ！ 折角彼が戦う処が見られると思ったのにあんまりじゃない！」

「……」

一体、誰のせいでこうなったのか……怒っているマーガレットを啞然と見上げる。どう考ても彼女が言える立場では無いのだが、その部分はスルーを決め込んでいるらしい。

「……」

そんな彼女に男は血管がぶち切れそうになったが、なんとか抑えて店を出て行った。

1人残されたベリルは呆然として深い溜息を吐き出した。

「はあ……まさかキャンセルとはな」

「酷い事するわね」

「誰のせいだと思っている」

他人事のように発した女性に目を据わらせてつぶやく。

「まったく……新人の頃ならいざ知らず。この年で食らうとはな」  
店を出て車に向かいながら発するベリルの後ろをマーガレットは  
追いかけた。

「私に何の恨みがある」

普段からほとんど怒らないベリルも少し苛立ち彼女を睨み付ける。

「ね、あなたって本当に死なないの？」

「……」

無視かこのやろう……いい根性をしてる。

半ば諦めてオープンカフェのテーブルの椅子に腰掛けた。

「ねえ。本当に死なないの？」

向かいに座ったマーガレットが再び問いかける。

「そんなに知りたいか」

「！」

頷いた彼女の前に、ダン！ とテーブルにナイフを突き刺し薄笑  
いを浮かべた。

「心臓に一撃で確認可能だ」

「……」

それに彼女は眉をひそめる。

## \* 命がけ

長い沈黙が続き互いに睨み合う。

「……………」

ガキじゃあるまいしバカバカしい……………ベリルはカフェ・ラテを傾けて小さく溜息を吐き出した。

「覚悟は出来てるのだろうか」

「当たり前よ。覚悟が無くて密着なんて出来ますか」

なるほど命がけのマニアか……………当然のように肩をすくめて言い放つ彼女に感心した。

「戦う男が好きなのよ」

さらに目を輝かせて続ける。

「ならば正規兵が警察関係者でも構わんだろう」

「初めはそうしてたのよ。でも刺激が足りなくてさ」

「……………」

呆れる彼をよそに照れ笑いを浮かべて続けた。

「なんていうのかな〜フリーの傭兵たちって自分の命より依頼の遂行を優先するでしょう？ それだけ重要なものを受けたんだっていう認識してるのよね。自らが受けた依頼を信じてさ」

「それはそうだが」

「だからって自分の命を粗末に扱う事はしないでしょ。上手く言えないんだけど雰囲気呑まれちゃうのよ」

「失敗すれば名を落とす事になる。正規兵とは違い大きなリスクも背負っている。それを……………」

「そうなのよ！ リスクを背負った姿……………ああつ、ステキ」

「……………」

これはだめだな……………溜息を吐いて頭を振る。

「ね、あなたつていま何歳なの？」

「60ほどだろう」

「！？ 本当？」

「嘘ではないよ」

「不死になったのっていつ？」

「少し身を乗り出した」

「25で35年前か」

「どうして不死になったの？」

「長くなるから話してやらん」

「ケチ」

言い放たれて頬を膨らませる。

「ホントに教えてくれないの？」

「知った処で何になる」

そう言われてしまえばそうだけど……知りたくないじゃない。

しばらく見つめていたが本当に言うつもりが無いらしく諦めて別の話題を振った。

「裏の世界では『公然の秘密』になってるけど、表の世界に知れたら大変な事になるわね」

「それは私だけはないよ」

肩をすくめる。

「他にも不死がいるってこと？」

「そうではない。人類の歴史にあるべき存在でない部分だ」

「ああ。そういうのって『ミッシング・ジエム』って言うんでしょ？」

直訳すれば『失われた宝石』だが、要約すれば『人類の歴史の中に埋もれた稀少な存在』という意味である。

「あなたには色んな名前が付いてるのね。『悪魔のベリル』『すばらしき傭兵』『死なない死人』『クラウ・ソラス』……」

「どれも気に入らんがね」

呆れたようにカフェ・ラテを口に含む。

ようやくまともな話をしてくれた彼に嬉しくなってさらに体を乗り出した。

「あなたの事を聞くと、みんな素晴らしい傭兵だと答えるわ」

「おだててもお前の希望には従わん」

カップごしに目を据わらせて言い放つ。

「チッ……」

思ったより強情ね。もつとすんなり諦めると思ったのに……小さく舌打ちした。

「……」

見た目がクールなだけに対応もクールだわ……などと考えながら、優雅にカップを傾ける様子をじつくりと眺める。

今まで出会ったどの傭兵とも違う雰囲気。あり得ない存在だからなのか元々、彼が持っている存在感からなのか……初めての相手にどう動くべきなのか考えあぐねていた。

でも今まで出会った誰よりも魅力的だわ。どんな戦い方をするんだろう……彼の戦いが見たくて仕方がなかった。大集団の戦闘指揮もこなせる技量を持っていると聞けば、どうあっても見たいと思う。いつそ私が何か依頼しようかしら……でもそんな依頼見つからないわ。

「……」

唸り続けている彼女を見やり怪訝な表情を浮かべた。

## \* 観察

とにかくこのままでは仕事にありつけない……ベリルは思案していた。目の前で唸っているこの女を、どうにかしなくては。

2人はそれぞれお互いが牽制し合っていた。どちらも相容れない思惑である以上、歩み寄りなど到底無理である。

「2杯目よ、コーヒー好きなの？」

再びコーヒーを注文した彼に口を開いた。

「お前のおかげでする事がなくてね」

「……」

無表情に嫌味を込めた物言いの彼を数秒見つめる。

「じゃあ私はオレンジジュース」

「……」

嫌味もスルーしおつたか……喉の奥で舌打ちした。

「ね、あなたの愛用してるハンドガンってどんなの？」

「！」

本当にめげない女性だと半ば感心した。

「P226だ」

「スイス製ね」

眉をひそめている彼に気付いて発する。

「大丈夫よ、メモったりしないから」

「なら良いが。！」

バックポケットの携帯が振動して通話ボタンを押した。

「なんだ」

<お前、傭兵マニアにタゲられたって？>

傭兵仲間のマイクだ。

「うむ……」

もう広まっている……

<適当に軽い仕事すりゃ離れてくれるからよ。そういう仕事探して

やるうか？>

それを聞いて、表情が明るくなる。

「軽い仕事なら満足しませんから」

表情で気づかれたのかマーカセレットがオレンジジュースを傾けながらしれつと応えた。

「……」

<おい。どうした？>

「軽い仕事は満足しないそうだ」

<なんだって？ そりゃ頑張れよ>

携帯を切って片肘を突きカップに口を付けた。

「いつまでくつついてるつもりかね」

「あなたの戦いが見られるまで」

「それは望めない状況下だ」

「中には物好きがいるわよ」

それまで仕事をせずにいるというのか……なんという勝手な奴なのだ。ここまで傍若無人な人間に出会ったのは初めてだ。

仕方なく溜息混じりにコーヒーを飲み干して立ち上がった。こんな処にいても仕方がないと、とりあえず車を走らせる事にした。

もちろん彼女がそれをただ見ているハズもなく、ベリルの後ろをちやつかりとついてきている。

「本当についてくる気が」

「当然でしょ」

言い切った彼女に目を据わらせて、その端正な顔を近づけた。

「！」

エメラルドの瞳に一瞬、体を強ばらせる。

「ならば襲われたとしても苦情は受け付けない」

「それでもいいわよ」

「……」

「どうしたの？ ドライブするんでしょ」

返ってきた言葉に啞然とするベリルを通り越して振り返って発し

た。

目的もなく走り続けるかもしれないと考え、店に寄って食料を多めに仕入れる事にした。

「！」

ついでに自分も買おうと商品を手に店内をうろつろしていると、前にカゴが現れ眉をひそめる。

「必要なものなのだろう」

「！ 買ってくれるの？」

やっぱり優しい人なのね！ と、嬉しそうにカゴに商品を入れた。

「飲酒運転？」

ブランドーを手にしたベルルに口の端をつり上げる。

「運転中は飲まんよ」

「だったらいいけど」

\* 暗雲

買った商品はバッグに詰め、たすき掛けにして車に向かう。

「両手を塞がない対策ね」

「!……?」

前方のビルの屋上に反射するものが目に入り彼女の腕を掴むとグイと引き寄せた。

「え?」

驚いた彼女がベリルに顔を向けた瞬間

「!」

壁に何か小さな塊が勢いよくぶつかつたような音がすぐそばで聞こえて振り返る。

「走れ」

冷静に発して彼女の背中を叩く。

「な、なんなの?」

車まで走るその間にも銃弾は2人めがけて放たれていた。その銃弾がベリルのピックアップトラックの窓に当たって甲高い音が響く。

「防弾ガラス……」

「早く乗れ」

エンジンを始動させアクセルを踏み込んだ。

しばらく走らせて落ち着いた処でベリルが小さく溜息を吐き出しマーガレットを一瞥する。

「何をした」

「私!??」

てつきり狙われているのはベリルだと思っていた女性は問いかけられて当惑した。

「お前を狙っていた」

「……」

思ってもいない言葉に頭が真っ白になる。

「思い出せ。何をした」

「ちよ、ちよっと待ってよ」

自分の置かれた立場に困惑し、落ち着かせようと頭を無造作にかきだす。

「酒でも飲むと良い」

「そう、そうね。そうさせてもらおう」

渡されたバッグから震えた手でブランデーの瓶を取りだし蓋を開けグイとラッパ飲み。

「私がどうして狙われるのよ」

なんとか落ち着いて口を開いた。

「それは私も知りたい処だ」

おもむろに携帯を取り出し車の前方に差し込む。

「？」

こんなアイテム売ってるの？ マーガレットは不思議そうにそれを眺めた。

ボタンをいくつか押すと、どこからともなく呼び鈴の音が響きマーガレットは驚いて車の中を見回した。

<ベリルか。どうした>

20前後と思われる男の声が車内に響き渡る。

「ルカ、ちよっと調べてもらいたい事がある」

「え？ え？ スピーカー？」

<女連れか。ああ、もしかしてマーガレット？>

「そつちにも広まっているのか……」

<一体どうした>

「どうやら狙われてるようだね」

<お前ならいつもの事だろ>

「私ではない」

<なんだ？ その女がか？ お嬢さん、どこかの傭兵に恨まれてもしたかい？>

「冗談じゃないわ」

「だが現に狙われている」

<で、何を調べるんだ？>

「まだ明確ではないが相手は複数いるようだ」

<！ 1人じゃない？ 解った。怪しい動きの奴を探してみよう>

「頼む」

携帯を抜きバックポケットに仕舞った。そして未だ当惑している彼女にチラリと視線を向けたあと発する。

「さて何故、狙われるのか。じっくりと考えていこうではないか」

「そんなのわかんないわよ」

酒瓶片手に頭を抱える。

「私はただ傭兵たちの戦いを見て話を聞いて、写真を撮ってただけよ」

「写真？」

眉をひそめた。

「今あるか」

「ええ、ここにあるわよ」

持っていたバックパックからケースを取り出す。

「最近のものを出せ」

「それならこれね」

SDカードを取り出すと小さなレストランのパーキングに車を駐め、そのカードを受け取った。タッチボードとハンドルの間にあるボタンを押すとカーナビの画面がスライドし、画面の下にあるくぼみにカードを差し入れる。すると画面に画像が現れた。

「ワオ！ これ凄いわね」

## \*ピンポイント

「これは……アーヴィングか」

映し出された人物に目を細めた。灰色の短髪に深い海の色をした瞳、40歳ほどの体格の良い迷彩服の男だ。

「そうよ。あなたの前に会ってきた傭兵」

マーガレットは自慢げに鼻を鳴らす。

「彼はあなたと違って紳士だったわ。快く私を側にいさせてくれたの」

「……」

聞いているのかいないのか、さしたる表情の変化も彼女に目を向ける事もなく画像を流していく。

「！」

一枚の画像に目がとまった。

「これは？」

「え？」

言われた画像に目をこらす。

「ああ、これね。別れたあとにあと一枚欲しいなって思って戻って撮ったの。誰かと話してたから邪魔するのも悪いと思って遠くから黙って撮ったわ。これがどうしたの？」

「……」

画像をじっと見つめる。

「もらっぞ」

「え？」

右手に携帯を持ちカーナビの下のボタンを左手で操作する。

「ワオ！ 赤外線通信まで出来るの？ 凄いじゃないこの機械。どこに売ってるの？」

「売つとらんよ」

さらりと言いながら電話をかける。傭兵の中にはこういった特殊

な機械を使っている者も少なくはない。

ベリルにいたっては道楽で開発している会社なりが試作品をよく送ってくる。現代では市販品の発展系が軍に流れるというシステムなのだが、傭兵の間では未だに市販になる前の商品が流通する場合もある。

「ライカか、今から送る画像を見てくれないか。おそらくニキ・オルソンだと思うのだが」

すぐに切って画像を送る。

「……ニキ・オルソン？」

数分後、電話が振動してすぐに出る。

「！ やはりそうか。うむ、すまんな」

「何？」

「画像を照合している暇が無いのでね。目の確かな仲間には訊ねた」  
発して再び携帯を操作した。

ひと段落し喉を潤したあと車を再び走らせる。

「で？ 誰なの、その……」

「ニキ・オルソン」

「そう、そのニキって人」

説明しようとしたとき携帯が震えて携帯を差し込む。

<よう、届いた画像見て驚いたぜ>

ルカだ。

<お嬢さん、とんでもない事したね>

「どういう意味？」

「ニキ・オルソンは武器商人だ。かなりきな臭いね」と、ベリル。

<俺たちが取引するような輩じゃないんだよ、こいつは。それがアーヴィングと接触してるってのは見過ごせるもんじゃない>

「じゃあ、これって……」

「おそらく写真を撮られた事に気付いて消しにかかったのだろう」

「じよっ冗談じゃないわ！ こんな理不尽な事で殺されてたまるもんですかっ」

マーガレットは声を張り上げた。

「幸運ではないか」

「え？」

「スクープだろう。希望通り私の戦い方も見られるかもしれない」

口の端をつり上げて言い放った。

「嫌な人ね！ 私の不幸を笑ってるんでしょ！？」

それには応えずクツクツと喉の奥で笑う。

「ぐ……この〜」

ぐうの音も出ない。

<まあまあ>

なだめるように割って入り安心させる言葉を投げる。

<アーヴィングの次をベリルにした事はあんたの幸運だったよ>

「え？」

<でなきや今頃、死んでたかもしれない>

ベリルの勘の良さには定評がある……彼がそう言つと運転しているベリルを見つめた。

「……」

『素晴らしき傭兵』

私がいま生きてるのはその片鱗……？

## \*オトリ

<とにかく、この画像だけじゃ決定的な証拠にはならない>

「頼めるか」

<任せておけ。そっちも頑張れよ>

「今の……どういう意味？」

今の言葉の意味が解らずいぶかしげに問いかけると、ストローがさされたジュースをひと口含んだあと応えた。

「ルカが証拠を探しているあいだ奴から注意を逸らさなければならん。アーヴィングもニキも用心深い相手だからね」

「そう……」

ぼつつと聞いていたマーガレットだったが、はたと気がついて彼に顔を向ける。

「……ってちよつと待って、それって」

ニヤリとしたベリルに目を丸くした。

「オトリになるってこと！？ ウソでしょっ！？」

声を張り上げた彼女に車を路肩に駐め、静かに口を開く。

「そこでだ」

「な、なに？」

ハンドルに腕を乗せ視線を向ける。そして

「いくら払う」

「！ お金取る気！？」

「これが仕事なのでね」

「信じられない……」

目を丸くしている彼女を黙って見つめた。

「払わない……って言ったら？」

恐る恐る問いかける。

「ここで降りてもらおう」

しれつと答えた彼にヒステリックな声を上げた。

「私を見殺しにする気!？」

「賞賛されるだろうね」

「……」

自分がしてきた事を思えば否定出来ない……

「それって、いくらなの？」

「基本は1万」

「! 1万!? どの通貨で？」

「US\$に決まっている」

さらにダラダラと冷や汗を流す彼女に追い打ちをかける。

「今回だと、あと1万はプラスだな」

「につ、2万!？」

「それでも破格の金額だ。自分の命と金とどちらが大切かね？」

言ったベリルをギロリと睨み付けた。(作中でのレート:1ドル

|| 95円)

「私をいじめて遊んでるでしょう」

「! 案外、冷静だな」

「!？」

嫌いだわこの人! 顔はよくても性格は最低ね! 口の箸を吊り

上げているベリルにパイとそっぽを向いた。

「払うのか払わないのか」

「別の傭兵を紹介して!」

「構わんが、誰も受けないと思うぞ」

肩をすくめた。

「どうしてよ」

「相手はアーヴィングとニキだ。普通に考えれば1000万ドル積

まれても願い下げだろう」

「! そんなにヤバい相手なの？」

「アーヴィングは名の通った傭兵、ニキは慈悲を持たない人間だ。

その2人が組んでお前を殺しにかかっているのだぞ、私くらいの物好

きでなければ引き受けんよ」

「……………」

嫌だけど彼に頼むしか、無いの？ 返事を待っているベリルを一瞥した。

「割引して……………」

「考えておく」

車は再び走り出し、差し込まれたままのベリルの携帯が鳴る。

<ベリル！ なんだかヤバい事になってるんだって？>

「うむ」

<傭兵マニアにストーキングされて、さらに狙われてるなんて最悪だな！>

「あんた誰よ！」

<おっと、怒られた。俺はライカ・パーシエルだよ>

「ライカ？ ハンターの？」

<さすがマニア。よく知ってるな>

「彼と知り合いなの？」

問いかけられたベリルは苦笑いを返した。

<ベリルは俺の師匠だよ。育ての親はクリア・セシエルだけどね>

「ええっ！？ あの『流浪の天使』と呼ばれたハンターの？」

<セシエルとベリルは親友だったのさ>

確認するようにベリルの顔を見ると、小さく肩をすくめて笑みを浮かべた。

<とりあえずこっちはルカと連携してサポートさせてもらっよ。何かあったらいつでも連絡して来てくれ>

「頼む」

電話を切り、舗装されていない1本道をひたすらに走る。

「！」

バックミラーに2台の車が映り眉をひそめた。雰囲気からしてこちらに用事があるようだ。

「しっかり掴まっている」

薄笑いを浮かべて発した。

「え？」

聞き返したとたん、後ろにいた車がピックアップトラックの両側に並ぶ。

「なっ、なに!？」

「追手だよ」

相手の車のガラスが開かれてマシンガンを持った男がこちらに銃口を向けた。

「!?! うそっ!?! どうにかしてよっ」

「黙っている」

「いくら車が防弾ガラスでも相手はマシンガンよ! 無理よ」

銃弾の跳ね返る音が真横から聞こえてくる。マーガレットは恐怖で頭を抱えた。

「これは特別製だね」

「え？」

「装甲は乗用車とは違うのだよ」

言ってペロリと唇を一度舐め、ハンドルを勢いよくきる。

「キャッ!?!」

車に体当たりしたその衝撃で相手の車はコントロールを失い派手に転倒した。

「.....」

「もう一台」

同じように体当たりして追跡を振り切る。

「4台トラックとタメを張れる」

呆然としているマーガレットに、しれっと言ったのけた。

\*いやがらせ

「そろそろ私だと気づかれている頃だろう」

「何かまずいことでも？」

「やり方が派手になる」

「？」

「どういう意味なんだろう……解らずに彼を見つめた。」

「少々の上ではめげないのでね。重火器を使用する恐れがある」

「大砲や地对地ミサイルを使ってくるって！？ 相手は女1人なの

よっ」

女は目を見開いた。

「しかし私がいる。ハンドガン程度では相手にならない」

「……」

自意識過剰だわ……さりとて言い放った事に呆れた。

「奴とは何度か組んだ事があってね、実際に奴がそう言ったのだよ」

『お前の動きを止めるには、ヘビーウェポンが必要だな』

「笑顔だったが目は笑っていなかった。本気で言ったとしか思えん」

「……」

ウソでしょ……たった1人の傭兵にヘビーウェポンですって？

何を考えているのよ、そのアーヴィングって人。

「ねえ……」

「ん？」

恐怖でしばらく固まっていたが、ふとそれで思い出し怖々と訊ねてみる。

「首を切り落としても生きてるの？」

「わからん。やってみるか？」

「！ 出来る訳ないじゃない」

口の端を吊り上げて応えた彼に語気を荒げた。

「麻酔は頼みたい。痛いのは勘弁だ」

「だから！ やる訳ないで……っ痛いのか？」

「人と同じにはね」

驚いたように見つめる彼女を一瞥しクスツと笑う。

「痛みは無いと思っていたか」

「てつきり……」

「とんでもない。痛みで気を失う事もしばしばだ」

「だったらどうしてこんな仕事……」

「私の生きる道は無いのだよ」

「！」

愁いを帯びた微笑みが彼女の心を突き刺した。

「でも、山や森にこもることだって出来るじゃない」

「私は仙人ではない。人の世に絶望もしていなければ人を嫌っている訳でもない。自身の持つ力をより良く使いたいだけだ」

「……」

嫌な人……じゃ、ないのかな……？

「処で」

「？」

「誘惑するつもりならもつと大胆にしてはどうかね？」

「？」

意味の解らないマーガレットに、ベリルは自分の胸元を指し示した。それに従い視線を降ろしていく。

「！？」

服のボタンが2つほど開いていて、ブラが少しチラついていた。

「い、いつから……」

「逃げるのに車に乗り込んだ時からかな」

「もっと早く言っつてよ！ バカ」

「クククク」

「このっ……」

前言撤回！ やっぱり嫌な奴！ 声を殺して笑っているベリルをギロリと睨み付けた。

「アーヴィングはあんなに紳士だったのに」  
嫌味を込めて聞こえるようにつぶやくと彼はクスツと笑みをこぼす。

「当然だ。早々に引き離すにはそれが最も効果的なのだから」

「！ そうなの？」

「奴は気むずかしい事で有名だね。その奴が紳士だとは笑い話にもならん」

「そんな……」

私は彼に軽くあしらわれていたの？ 愕然としたあと怒りがふつふつと湧いてきた。

「傭兵と接していきなければもつと考える事だ」

「そうね……そうするわ」

さすがの彼女も返す言葉が見つからない。

しばらく車を走らせているが、目的地を探している気配もなく怪訝に問いかけた。

「どこに向かっているの？」

「適当に」

「そ、そう……」

本当に適当な気がして二の句が継げない。

「！」

バックミラーにヘリの機影が映りベリルは険しい表情を浮かべた。

「マーガレット」

「なに？」

「ハンドルを頼む」

片手でバッグの中からショットガンを取り出し発する。

「え？」

言ってガラスを下げハンドルから手を離した。

「わあっ！？ ちよっ、ちよっ！？」

慌ててハンドルを助手席から握りしめ驚く彼女の耳にヘリの音が

徐々に大きくなる。

「……」

へり？ という事は……

薄笑いで固まった刹那 激しい音と衝撃が周り中から響き渡った。

「ぎよええー！？ マシガン！？ ウソでしょ！？」

携帯式のマシンガンと違い、へりのマシンガンは威力が桁外れだ。いくら特別仕様のトラックとはいえ、これはキツいんじゃない？ ハラハラしてハンドルを握る。

「？」

一体どこを狙っているんだろう？ ショットガンを構えているベリルをチラチラと見やる。

「……」

彼は狙いを定めてペロリと唇をひと舐めたあと、引鉄を一度引いてすぐハンドルに手をかけた。

「えっ？ それで終わり！？」

「不時着は可能な範囲だろう」

そのまま追跡して来るじゃない……そう思ったとき、わずかな視界から煙を噴いて遠ざかっていくへりが見えた。

「へ？」

「燃料タンクを狙った」

たった1発で命中？ 凄すぎるわよ。

啞然としているとカーナビに差し込んでいた携帯が鳴った。

<ベリル>

ルカの声だ。

<なんとか証拠を掴めそうだが、そっちはどうだい？>

「先ほどへりを撃墜した」

<車の追跡にへり。次は道路を封鎖してくるぞ>

口笛を鳴らして発した。

「だろっな」

「ちょっと！ 楽しんでるんじゃないでしょうね！？ 冗談じゃないわよ！ 巻き込まれる身にもなってよっ」

まるで緊張感のない2人の会話にヒステリックに張り上げる。

<良く言っぜ。自分からまいた種だろ>

「うっ……」

しかし、そんな言葉にめげる彼女ではない。

「わ、私のおかげで解ったんでしょ！ 感謝くらいしてよね！」

<おほ、言っねえ。あんたが見つけなくてもいずればれたさ。

俺たちはそれほどバカじゃない>

\* 反撃用意

「まあまあ」

今度はベリルが2人をなだめた。

「それより、追跡はしてくれているか」

「もちろん。そっちはライカがやってくれてる。封鎖されたらすぐに連絡してくれ」

電話を切ったあとラジオのボタンに手を伸ばすと軽快な音楽が車内に広がった。

「ねえ……これからどうするの？」

「ルカが証拠を掴んだあと、こちらから仕掛ける」

「攻撃するってこと？」

それには答えず他の質問を投げる。

「武器は何を持っている」

「これよ」

出された黒い塊を一瞥する。

「H&K（ヘツケラー ウント コツホ）USPか。いい銃だ。ナイフは」

首を横に振った彼女に小さく溜息を吐き出すと、バッグからナイフを取り出し渡した。

「常に2種類を持って」

「ありがとう」

「ナイフ代も付けておく」

「これもお金取る気なの！？ ガメついわねっ」

そうか、これはいやがらせなのね。今までの傭兵たちの恨みを込めて彼が代表のように私にいやがらせをしているんだわ。

そう自分で結論付けたのはいかげなものかとも思っただが……彼女はそれからさらに思考をめぐらせた。

確かに彼が言ったように、一方的な想いで彼らを追いかけ回すの

は良くないかもしれない。あまりの情熱に先走ってしまっていたわ。気付くのが遅すぎるが反省したという事には、ある程度の賞賛は与えたい。

「……………」

マーガレットは己のに反省したあと、彼の横顔を見つめた。

それを覗けば、彼はとても優しいのだわ…………… ナイフもくれたし、なんだかんだで実は色々教えてくれてる。綺麗だし。

「……………」

何か勘違いしているな…………… 見つめてくる気配を感じて眉をひそめる。

もちろんこれまでの仲間の復讐もあるが、単にそれを口実に嫌がらせを楽しんでいるだけなのである。元々彼は嫌がらせで反応を楽しむ悪いクセがある。

「単なる嫌がらせだ」とあえて告げ彼女を怒らせるのもどうかと彼は無言を貫いた。

<ベリル、そこからコロラドに向かってくれないか>

再び鳴った電話に心えるとライカの声が響いた。

「コロラドか」

<そこからちよつと北にある線で頼む。こつちで捕捉してるから。>

途中の中継基地からの合図でカーティスが合流するよ>

「解った」

電話を切ったあと、バッグから取り出した物を手渡す。

「ヘッドセット?」

「これから忙しくなる」

一通り使用説明して彼もヘッドセットを装着し携帯を仕舞う。

「! いいの?」

「今後はこれで全てをこなす」

ヘッドセットを指さした。

「バッテリーとか大丈夫なの?」

「外部バッテリーだ」

今は車から電源を引いていると説明した。

「……」  
「なんだかこの車って最先端いつてない？ 普通に乗っていたら気が付かないけど、凄い技術が組み込まれているような……」

「知る通り、今は市販の物から軍に流れる仕組みだが傭兵の中には市販の前に使用される機器類もある」

「！ そうなの？」

「全てという訳では無いがね」

「ずっと傭兵に張り付いていたのに全然気付かなかった……カーナビをマジマジと眺めてボタンを押してみる。」

「あれっ？」

何も起こらない……

「指紋認証だ」

首を傾げている彼女にクスツと笑みをこぼす。

「……そうなの」

「防犯のためにね」

状況によっては車を乗り捨てる場合もある。

「！」

感心しているとヘッドセットから電話らしい電子音が続いた。慌てて教わった通りに小さなボタンを押す。

<こっちの準備は出来た>

「カーティスだよ」

聞き慣れない声にいぶかしげな表情を浮かべている彼女に応えた。

「！ ああ……さっきライカって人が合流するとか言ってた人ね」

「こちらはあと3時間ほどで境界線に到着する。それまでに奴らが動くだろう」

<了解。気をつけてな>

動く……動くって、殺しに来るってこと？ マーガレットはドキドキした。

「何かにしがみついておけばいい」

「そうさせてもらっわ……」

それから1時間

「来たようだ」

「うっ……!？」

前方に見える大型トラックは目一杯に道路を塞いでいる。

「どうするの？」

「このまま進む」

「ええええっ!？」

いくらなんでもムリムリ!

「撃てるな」

「私がつ!？」

「当てようとしなくて良い。とにかく前に撃て」

「ホントに私がやるのっ!？」

「ウソでしょ!？ マジなの!？」

銃を取り出す手が大きく震えている。その慌てっぷりに頭を抱えた。

「落ち着いて。慌てなくて良い」

これでよく今まで仲間たちの側にいられたものだ……

\*とりあえず

「マシンガンにするかね」

「もつと無理よ！ 黙ってて……」

なるほどね……ベリルは彼女の様子に納得した。

傭兵のストーキングはしていても、その仕事に慣れている訳じゃない。彼らがする仕事を見慣れているというだけなのだ。自分とは関わりのない事を間近で見学していたに過ぎない。

いざ自分に降りかかったとき結果はこうだ……呆れて溜息を吐き出した。

「もう良い」

「え？」

内心ほつとしてマーガレットは銃を下げた。

「掴まっている」

アクセルを踏み込み速度を上げる。

大型トラックの前に立ちほだかる数人の男たちは手に持っているライフルやショットガンでピックアップトラックに発砲を繰り返した。

「……」

唇をペロリと舐めてハンドルを勢いよく右に切る。

「……」

目の前で左に曲がるオレンジレッドの車が道から外れて大きくバウンドした。そして道を塞いでいるトラックの後ろをかすめて通り過ぎ、再び道に入ってそのまま走り去る。

「……」

あまりにももの鮮やかな運転に、男たちはしばらく呆然と立ちつくした。

「……た、助かった、の？」

シートベルトから微かに震える手を離し

「抜けた」

無表情に発するとヘッドセットからライカの声が響く。

<さすがベリル。しばらくしたらカーティスの車が見えるハズだ>

それからおよそ2時間

「！」

路肩に大きなジープが駐まっけていてその側にいる人物に見覚えがある。

「ベリル」

ジープの後ろに停車すると、彼の名を呼び男が近づいてきた。窓を開け手を軽く挙げて応える。

「！」

カーティス……ああ！ ずっと前に密着した人だわ。ブラウンの髪の毛、がっしりとした男を見つめた。

「動いているのはニケの部下だ。アーヴィングはこの近くの住処にいるらしい」

外に出たベリルに男が応える。

「ルカの方は」

「なかなか掴めないようだ」

「そうか」

小さく溜息を漏らした。

「どう思う？」

「どうも妙だな」

おもむろに訪ねたカーティスに言葉を返す。

「やっぱりそう思うか」

バレたならそのまま向こう側の人間として生きればいい。なのに何故ここまで殺しにかかるのだろうか……問題は画像だけじゃないのか？

「しかし画像以外に思い浮かぶ事は無い」

「じゃあ……問題はお前じゃない？」

「！…………？」

カーティスの言葉に怪訝な表情を浮かべた。

「お前を狙ってるってこと」

さらに眉をひそめる。

「あの女だけだったら殺してそれで終わったけどよ、お前だと解って狙いを変えた」

「何故今更…………」

「あいつ、前にぼそつと言った事があるんだ」

『ベリルを自由に出来ればこれほど強いものはない』

「なんだそれは」

「つまり私は利用された訳ね」

頭上からの声に見上げると、開かれたドアの窓からマーガレットが2人をじつと見下ろしていた。

「じゃあ私が彼から離れたらこの騒動も終わるってこと？」

「そう簡単にはいかないだろうな」

カーティスが2人を交互に一瞥して応えた。

「重火器を使用される可能性は考慮にいれるべきか」

「あゝそれあり得る」

「！ 物騒なこと言わないでよ」

「心配しなさんな。ベリルがあんたを死なせないから」

「奴を向こう側の者として置く事は許容しかねる」

「それは同感だ。みすみす敵を増やしたくない。どうせならニケも一気に倒してしまいたい」

「やっぱりあれか？」

「うむ」

「？」

口の端を吊り上げている2人に首を傾げた。

携帯を取り出しボタンを押しているベリルを確認してカーティスは静かにするように人差し指を唇にあてて彼女に示す。

彼の携帯とヘッドセットは連動しているため、彼女のヘッドセッ

トにも電話の呼び出し音が響いていた。

<…… お前からかけて来るとはな>

「アーヴィング。随分と執拗だな」

口の端をつり上げる。

「!?!」

アーヴィング!? マーガレットは声を出しそうになった。

<女は諦めてやる。代わりに俺と一緒に来い。断ればその女は殺す>

それに喉の奥から笑みをこぼす。

「私にそちら側につけというのか」

<俺の部下になれ>

「ククク。永遠に人間の敵になれと」

<破壊者の顔こそが本来のお前の正体だ>

「急用を思い出した」

しれつと言い放ち通話を切る。

「……」

なに今の切り方…… マーガレットは啞然とした。

「かけてくると思うか?」

「かけてくるだろうね」

「あんなんでかけてくるハズ無いじゃな……」

呆れたマーガレットの耳に呼び出し音が響く。

<いつまでふざけているつもりだ?>

ホントにかけてきた……

## \* 仕方ない

< 言うておくが捕捉しているのはお前の仲間だけじゃないんだぞ >  
「だろうね」

男の声に目を据わらせる。

仲間だけではない　マーガレットの行動までも捉えているという脅しだ。そうする事で彼女とベリルが離れられないように仕組み、彼の動きを制限した。

< この通話から俺の居場所を追跡しようとしても無駄だ >

「そんなつもりは無い」

< しばらく時間をやろう。いい返事を待っている >

ベリルの反応を待たず通話は切られた。

「てことは、あの住処にはいないってことか」

「そうらしい」

「ご指名を受けた気分は？」

発したカーティスに肩をすくめる。

「さてと、これでこちらから攻撃を仕掛ける口実が出来た訳だ」

「どういう意味？」

彼女はカーティスの言葉に首をかしげた。

「条件付きではあるが殺人を予告してきた」

「敵が特定出来ない時点で予想を立てて攻撃するのはさすがにキツイんでね。堂々と言って来た相手ならこちらもそれに対応出来る」

笑みをこぼしたあと、鋭い眼差しに代わる。

「騙し続けてきた報いは受けてもらう。傭兵対武器商人の戦いだ」  
「！」

戦い……凄い戦いが見られるんだわ……マーガレットは身震いした。

「とりあえず捕まってくれな」

「彼女を頼む」

「え？」

今のはどういう意味？

「大丈夫。俺たちがちゃんとサポートするから」

安心させるようにマーガレットに笑顔を振りまくが、一体これから何が行われるというのだろう。

「奴を捕えるにはまず私が捕らわれなければならない」

「ええっ!？」

「奴を油断させるためにね」

アーヴィングを捕える最良の作戦はベリルが奴に捕まること……

「っ、捕まるって……どうするの？」

「決まってるだろ。奴らの攻撃に当たればいい」

カーティスの言葉に開いた口がふさがらない。

「私はどうなるのよ!？」

「極力、怪我のないように考慮しよう」

「……極力？ それって少しは怪我するってことよね」

「無傷だったら怪しまれるだろ」と、カーティス。

「信じられない……」

この人たち無関係の人間にまで犠牲を強いるワケ？

この期に及んでまだ自分を「無関係」と言える彼女の根性に乾杯したい気分である。

「諦める」

しれっと応えたベリルを睨み付けていると、バッグから何かを取り出しこちらに差し出した。

「防弾ベスト？」

「爆発にも多少使える。ただし、痛がるフリはしてもらいたい」

多分そんなことしなくても普通に痛がって動けないと思うわ……ベストを受け取って彼を見つめる。

「！ あなたも着るの？」

ベストを着用したベリルに怪訝な表情を浮かべた。

「怪しまれないようにね」

「へえ……」

細かい部分にまでこだわるのね。それくらい相手が手強いってことか……私が会っていたアーヴィングは演技をしていたのね。

そう思うとなんだか悲しくなってきた。みんな私とは正面きつて会話をしてくれていなかったのかも……記憶にあるのは面倒そうな顔をする傭兵たちの表情。

適当にあしらわれて、それで満足して他の傭兵へ

「……」

でも、彼は違った……ずっと私に真正面から会話してくれていた。私はバカだったんだ。

マーガレットはベリルを見つめて少し切なげに瞳を潤ませた。

\*捕まりました

ようやく気付いたか……銃<sup>ハンドガン</sup>を握りしめる彼女の表情にベリルは目を細め小さく溜息を吐く。

そしてカーティスと別れて車を走らせていると携帯が鳴った。相手はもちろん……

<決まったか>

「うむ」

数秒の沈黙のあと口を開く。

「もうしばらく考えさせてはくれないだろうか」

<そうか。いつまでもそんな態度でいられると思うな>

しれっと応えた彼の言葉に強い反応を示さず、男は低く発して通話を切った。

「あんだ……四六時中そんな態度なワケ？」

彼女は眉間にしわを寄せて薄笑いを浮かべている彼を見つめる。

「相手にこちらの不利を伝える意味もなからう」

捕まるまでは余裕を見せておきたい……と付け加えた。

「……」

こうなる前からそうなんだけど、と彼女はその言葉を飲み込む。

「！」

そうこうしているとマーガレットの耳にへりの音が近づいてくるのが聞こえた。

攻撃に当たるって言ってたけど、この車そう簡単に壊れないわよね

……どうするんだろう。

「そろそろかな」

ベリルがそう言った刹那

「きゃあっ!？」

タイヤを撃たれた!? これはわざとなのっ? 偶然なのっ?

焦りながら彼の方を向くとウイंकをした。どうやらわざとのよう

だ。

車は派手に横転して止まるその上空をへりが旋回していた。

「大丈夫か」

「な、なんとか……」

ひっくり返った車からはいずりながら抜けだし、痛む体を押さえ  
てベリルに目を向ける彼女の目に飛込んできたのは、へりのマシン  
ガンに胸を貫かれたベリルの姿

「ベリルー！」

叫んだ彼女にマシンガンを威嚇射撃が浴びせられた。

「ぐ……っ」

片膝について胸を押さえた彼の口元から少しの血が流れる。黒い  
車が横転したベリルの車の近くで止まり男が出てきた。

「どうした。もう終わりか？」

「……アーヴィング」

男を見上げて苦い顔をしたベリルを冷たく見下ろし、一緒に来た  
他の男たちに手を挙げて指示すると、男2人はマーガレットに歩み  
寄った。

「！ よせ」

「まだお前の了解を取っていないのでな」

彼女まで連れて行かれるのは予定外だ いや、あつて当然のこ  
とだった。その事を見落としていたのだ。

「……」

ベリルは唇を噛みしめ、麻醉銃を突きつけているアーヴィングを  
睨み付けた。

「っ……」

麻醉銃から鈍い音が響き彼の胸に麻醉針が突き刺さる。

痛みを示す表情からしばらくすると眠気に襲われはじめ、ゆっく  
りと地面に体を横たえた。完全に眠ったことを確認し男はベリルを  
抱えて乗ってきた車に向かう。

「どうしてそこまで彼に執着するの？」

対面式のシートの向かいに手錠をかけられて座っているマーガレットがアーヴィングを睨みながら訪ねた。

男は、自分の隣で意識のないベリルを一瞥する。

「誰でも倒れない部下は欲しがるものさ」

「だからってこんなやり方……」

「お前には解らん。こいつの能力はな」

言いながらベリルに再び麻酔を注射し肩をすくめた。

「女をたらし込むのにもこの容姿なら十分だ」

「！」

そこはまあ納得するけど……って、違う違う！ と彼女は頭を数回振った。

「彼があなたの言うコトなんて聞くのかしら」

「こいつの唯一の弱点は優しさだ。目の前で人が傷つけば自分が傷

つく以上に苦しむ」

「苦しまない人間がいる方がおかしいのよ」

「俺は平気だがね」

「……なんて人なの」

「人のために犠牲になるなどバカらしくなったのさ。俺は自分のために生きる」

「あなたはかつては素晴らしい傭兵だったとベリルは言ってたわ。

なのに……」

少しふるえた声で発し怒りを真正面からぶつけた。

「自分の力を自分のために使って何が悪い」

40歳を越えたアーヴィングは金に心を奪われた……

『もつと金を！』

そのためにベリルを利用するつもりなのだ。

「……」

そんな事のために彼を利用していいワケが無い。彼を助けない。

でも……一番それを邪魔するのは私なんだ。

しばらく走っていた車は、ゆっくりと何かの施設に入っていた。

\* 怒り

そうして施設に入り、マーガレットは後ろ手に手錠をかけられて合金製の檻の前に立たされる。檻の中にはまだ目を覚まさないベリルが寝転がっていた。

「眠ってるフリはやめろ」

アーヴィングが言い放つと、目をぱちりと開いてゆっくり立ち上がった。

「！」

マーガレットの首にナイフを近づける男に動きを止める。

「いいの、何も言わないで。あなたはこの男の言いなりになっちゃダメ」

彼女は震えた声で吐き捨てるように発した。

「ククク……勇敢なお嬢さんだ」

「あうっ！？」

笑いながら彼女の腕に刃を走らせる。

「！ よせ！」

「返事は？」

「……」

苦い表情を浮かべる彼に口の端を吊りあげ男は問いかけた。灰色に統べられた広い部屋に違和感なく設けられた鉄格子の内側で黄金に飾られたエメラルドが憎らしげに男を見つめる。

「だ……ダメよ」

「しばらく……時間をもらいたい」

「心の準備が必要か。いいだろう」

目を伏せるベリルを見て彼女を突き放すと崩れるように倒れ込んだ。

「大丈夫か」

しゃがみ込み眉をひそめる彼女に声をかける。

「こ、これくらい平気よ」

マーガレットはにこりと笑い、瞳を曇らせた彼に少し目を吊り上げた。

「言っときますけどね、私はあなただけのために頑張ってるわけじゃないですからね。あなたがあいつの言いなりになったら悲しむ人が増えるから頑張ってるのよ」

そんな彼女にベリルは小さく笑った。そこに包帯が投げられる。「手当てくらいはさせてやる」

「……」

ベリルはゆっくり包帯を手にしマーガレットの腕の傷に巻いてやる。手当てさせる事で彼の情を強めるつもりだ。

「あいつ、人を平気で殺せるって言ったのよ。信じられないでしょ」

「うむ」

「あなたに女をたらし込ませる気よ」

「！ ほう」

感心するような声を上げた彼を一瞥して溜息を吐きながら檻にもたれかかる。

「正直、それには納得したけど」

「そうなのか」

表情の解らない返答を聞いたあと、こちらを見ているアーヴィングをギロリと睨み付けた。

「嫌な奴ね……人の話ニヤけた顔で聞いているわ」

「あまり悪口を言うと撃たれるぞ」

「時間を稼いで仲間が助けに来るのを待つつもりなら無駄だ。お前たちの持っていたものは全て処分した」

「私の大切な画像もよ。信じられないわ」

「適切な判断だ」

「ひどい！」

「さて、決まったか？」

コーヒーを飲み終えたアーヴィングが立ち上がりマーガレットを

グイと引き寄せて立たせた。

「……」

「まだ待てと言っなら女の腕を切り落とす」

「！ それって酷くない!?」

「嫌なら奴を説得しろ」

男は女の首に刃を向けてベリルを見据えた。彼はそんな男に深い溜息を吐き出す。

「仲間が敵になるのは悲しい事だ。私に語ってくれたお前の信念はどこに行ったのだ」

「ハッ！ そんなもので何が手に入る。傷ついてボロボロになって手にするのは、はした金だ」

肩をすくめて薄笑いを浮かべ発した男に、ベリルは鋭い眼差しを向けた。

\*その上をいく者

ゆらりと立ち上がり男を静かに見つめるその瞳に憂いを湛える。

「もう……以前のお前には戻らないのだな」

「無理だな」

「処で」

鼻で笑った男から視線を外し、話を切り替えるように口を開いた。

「私に女性の対処をさせると聞いたが本当なのかね」

「そんな事が気になるのか？」

「苦手なのだ」

当惑しているベリルに口の端を吊り上げて応える。

「心配するなよ。いつも通りにしていれば勝手に向こうから惚れてくれる」

「！ ほう？」

マーガレットに訪ねるような顔を向けると彼女は肩をすくめた。

「限界だ。返事は？」

アーヴィングは女の首に刃を軽く当てる。

「……っ」

マーガレットは恐怖に顔を少し上げた。その様子を一瞥しベリルは左手の人差し指をつい……と立てる。

「あと一つ」

「なんだ」

「持ち物を全て処分したと言ったが……」

一度、目を閉じて次に開いたその瞳は男を見据えてゆっくりと自分の腹部を指し示した。

「この中の物もかね？」

「！ なんだと！？」

刹那 地面が大きく揺れる。

「何だ！？」

「!?!」

マーガレットはすかさず驚くアーヴィングの足を蹴り飛ばし、ベリルの檻に駆け寄った。

「……」

ベリルの顔を見つめ微かに聞こえてくる多くの足音に、この施設が安全でなくなったことを悟り薄笑いを浮かべるベリルを凝視した。

「まさか……飲み込んでいたというのか」

普通なら死んでいる。ベリルだから出来た事なのだ。

「さて訪ねよう。死か罪を償うか」

「……」

しばらくの沈黙のあと、男は喉の奥から絞り出したような笑みをこぼし銃口をマーガレットに向けた。

「!?!」

「その女も道連れだ」

「まだ罪を負うつもりか」

「う……っ」

冷たいエメラルドの瞳に恐怖で硬直し、引鉄ひきがねを引く事が出来ない。

「お、ベリル」

そうこうしている間にカーティスが他の仲間と共に部屋に入ってきて、微かに震えているアーヴィングの手から銃を奪い他の仲間を引き渡す。

「お前、睨んだだろ。震えてたぞ」

「風邪でも引いたのだから」

檻の扉が開かれて出てきたベリルは薄笑いを浮かべた。

「お嬢さんも一緒に連れて行かれるのは予定外だったなあ。なんで思いつかなかったんだらう?」

「彼女については数々の私怨があったためだろう」

手錠を外してもらっている彼女を見つめて首をかしげるカーティスにベリルはしれって応える。

「!?! ああ。なるほど」

聞いたカーティスは納得したように手を打った。

「ちよつと！ それどういう意味よ！」

しつかりと聞こえていたマーガレットは高笑いで逃げるカーティスを追いかけた。

「ありがとう」

「！」

一通り落ち着いた処でベリルにぼそりとつぶやく。

「あなたのおかげで自分の間違いに気付いたわ」

「そうか」

柔らかな笑顔でそう返した彼の横顔を見つめる。

『特別な事をしなくても女は惚れる』

アーヴィングの言葉は確かにそうだと思った。

「？」

彼が何故か困惑した表情を浮かべていることに気がつく。

「誘惑するつもりならもっと派手にすると良い」

「え？」

ドキつとして胸元を見るが、はだけていない……そんな彼女にベリルは無言で自分の右脇腹を示した。

「…………？」

示された場所に目を移すと、服が大きく裂けてブラジャーが丸見えだった。

「！？ きゃああああー！」

「あつはつはつはつ」

叫ぶマーガレットに大笑いした。

## \*エピソード

その後　マーガレットはもちろん傭兵マニアを続けている。  
それまでの自分を反省し彼らの仕事を理解して、時にはサポート  
までもこなせるようになったのだ。邪魔に思われていた彼女が、い  
つしか必要とされる事もあった。

そうして多くの祝福を受けて傭兵と結婚した。

1つ年上のアメリカ人でベリルもよく知る人物だ。式にもパーテ  
イにも顔を出さなかった彼だが、宛名の無い荷物は2人を喜ばせた。  
そして誰でも結局はそう言うように、彼女も「子供は傭兵にはし  
たくない」と周りにはこぼしている。

「ベリルをいつか殴り飛ばす」  
それが彼女の口癖だ。

END

**\*エピソード(後書き)**

\*最後までおつきあいくださり、ありがとうございます。  
皆様が少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2451w/>

---

マニア・タイフーン

2011年9月30日19時27分発行